ギリシアの初期鉄器時代の遺跡（６）
イタケ島のポリスとアエトス

髙橋　裕子

Early Iron Age Sites in Greece（６）
Polis and Aetos in Ithaka

TAKAHASHI Yuko

This paper is the sixth in the series “Early Iron Age Sites in Greece”. It focuses on Polis and Aetos in Ithaka (Ithaki). A review of the Early Iron Age finds from these two sites put great emphasis on the religious features.

はじめに

ギリシアの西方に位置するイオニア海はアドリア海への入口でもあり、通時的にギリシアとイタリアとを結ぶ海上交通の要衝として機能してきた。そのイオニア海の東側、すなわちギリシア本土に近い島々から構成されるのがイオニア諸島である。これらの島々はヴェネチアやイギリスなど諸外国に支配を受けた特有の歴史を有しているが、それはすなわちイオニア諸島が地政学的にいかに重要な存在であるかを端的に物語っている。

イタケ（イサキ）島はイオニア諸島の中では中央よりもやや南方、ケファレニア（ケファロニア）島の北東側に所在している。二つの島（ないしは半島）が連結したような形状をしており（図１）、面積は全体で94.4km^{2}である[1]。西隣のケファレニア島が760km^2、北側のレウカス（レフカダ）島が294.5km^{2}であることと比べると小さいが[2]、しかしその注目度はむしろ群を抜いた存在であった。その理由は述べるまでもなく、ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』の主人公である英雄オデュッセウスの故郷とされる島だからである[3]。トロイ戦争が終結したあとオデュッセウスがトロイからイタケへ帰還するまでの長い旅の様子や、故郷で自分を待つ妻に付きまとう求婚者たちをやりこめる場面が

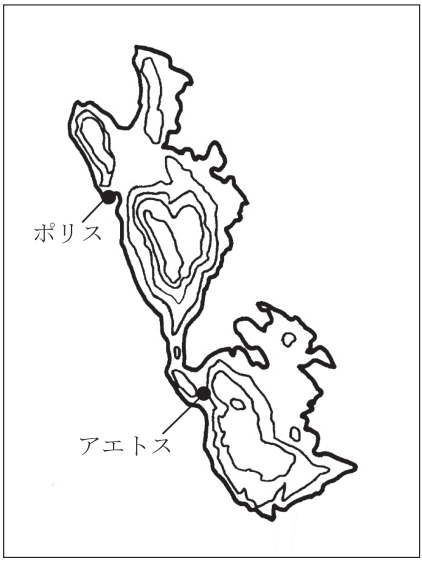

図１　イタケ島地図
（Souyoudzoglou-Haywood 1999 の見返しの地図をもとに筆者作成）

『オデュッセイア』には描かれている。異論はあるが、オデュッセウスの故郷であるホメロスの叙事詩のイタケ島は、一般に現在のイサキ島であると見なされている。

周知のとおりホメロスの叙事詩に関しては、そこに描かれている社会がいつの時代のものであるかという問題が喧しく議論されてきた。主要なものとして、ミケーネ時代、初期鉄器時代、複数の時代の要素が混在していて特定の時代を反映するものではない、といった意見が提出されている。この問題は本稿の本来的な課題ではないため深入りすることはしないが、ただしホメロスの叙事詩を考える上でイタケの資料状況を把握しておくことは必要不可欠な作業である。

また初期鉄器時代研究においては、イタケ島は重要な宗教関連資料が出土していることで注目されてきた場所である。初期鉄器時代に関しては概して宗教や信仰にまつわる資料が少ない。その後期に神殿が建立されるようになると増加していくが、それでも他の時代に比して豊富とは言えまい。ましてやその前半期に関しては、宗教関連の遺構や遺物は僅少である。ところがイタケからはかかる傾向に反するような稀有な資料が発見されており、しかもそれがポリス

とアエトスという二つの遺跡で確認されている。また両遺跡ともに21世紀に入ってから新たな知見がもたらされ、当該期の研究における重要度は近年ますます上昇している。

そこで本稿においては、初期鉄器時代を中心にイタケ島のポリスおよびアエトスの考古資料に焦点を絞って検討するが、まずは島全体の調査史および資料傾向を確認しておこう。

イタケに関する調査および研究

イタケ島は英雄オデュッセウスの邸宅を発見したいという野望を抱いた人々を、長期にわたって魅了し続けてきた。19世紀以降それを試みた旅行家や研究者が幾人も訪れており、イタケに関する文献が発表されることもあった[4]。ホメロスの叙事詩を史実と信じていたH. シュリーマンも、華々しい成果は得られなかったが、調査を行っている[5]。

ただし、イタケにおいて本格的な調査が開始されたのは1930年代のことである。イギリスの調査隊がポリスやアエトスなど主要遺跡をはじめとして島内の各所で発掘を行った[6]。これによりオデュッセウスの故郷という要素が圧倒的に大きな比重を占めてきたイタケ研究に変化が生じ、考古資料に基づく学問的研究の端緒が開かれることになった。

近年では徐々にホメロスの叙事詩からの脱却が進展しつつあり、島の歴史がより総合的に解明されるようになってきた。たとえば20世紀まではイタケの人的活動の痕跡は初期青銅器時代が最初であると見なされていたが、現在ではそれよりも数千年早い中石器時代や旧石器時代にまでさかのぼることが確認されている[7]。このように今では石器時代からローマ時代にいたるさまざまな時代の遺構や遺物が発見されており[8]、イタケの歴史が全体として提示されるようになってきた。

かかる動向の中で不可解なことがらが、ミケーネ時代に関しては現在にいたるまで大規模な遺跡が発見されていないことである。ミケーネ時代はイタケの古代の歴史の中で最も注視されてきた時代と言っても過言ではなく、それはホメロスの叙事詩との関係からであるが、今もってアガメムノンの故郷であるミケーネに比肩しうる遺跡は発見されていない。イタケでもミケーネ時代の遺跡は数か所確認されているが[9]、いずれも多くの人たちが期待するような“オデュッセウスの宮殿”を想起させるようなものではない。この点は今後も注目を

集める問題であろう。

それに対して初期鉄器時代に関しては1930年代の調査から華々しい成果が得られており、とりわけ島の北西部に所在するポリスと中央よりやや南方に位置するアエトスの二か所は当該期の重要遺跡と目されてきた。以下、最初にポリスの、次にアエトスの資料を紹介していこう。

ポリス

（１）概要

ポリスはイタケ島北西部のポリス湾近郊に所在し（図１）、初期鉄器時代の宗教関連資料が出土したことで著名な遺跡である。この場所における最初の発掘は1864年のことで、シュリーマンが行ったものであるが、しかし彼はその重要性に気が付くことなく終了させている[10]。二度目の発掘は別の研究者により1904年に行われ、ミケーネ時代の土器片などが発見されたが、この時も必ずしも際立った成果が得られたとは言えない[11]。そして不幸なことに、これらの初期の調査は遺跡を破壊することにもなったと指摘されている[12]。

ポリスが大きな注目を集めるようになったのは三度目の発掘であるイギリスの調査で、1930年および1932年にＳ．ベントンが指揮をとった[13]。さまざまな時代の資料が多数発見され、この場所でオデュッセウスが祀られていたことも明らかになったことは一般の注目を集めることにもつながった[14]。また初期鉄器時代に関しては青銅製の鼎などが発見され、この時代における稀有な“洞窟聖所”として当該期を専門とする研究者の耳目を集める存在となった。

それ以降初期鉄器時代研究においてはベントンの報告論文をもとに多くの研究者がポリスに関して言及しており、また1991年にはポリスの土器に焦点を当てた論文も発表された（図２）[15]。ただしこの遺跡に関しては公表されていない資料も少なくなく、かかる状況の中で2008年に土器、青銅製品、土製品、ランプなど青銅器時代からローマ時代にいたる多数の出土遺物が紹介された著作が出版された[16]。遺物の写真や図面が多く掲載されており歓迎すべき側面もあるが、しかしその内容に関してはイタケで調査をしている研究者から批判が提出されており、参照するに際しては注意が必要である[17]。

ところでこの地の地理的特性に関してベントンの調査報告は洞窟が崩壊した場所であるという見解を提示しており[18]、それ以来ここは一般に洞窟遺跡と見なされてきた[19]。ところがそれが2021年に発表された論文において誤りである

ことが指摘され、長年にわたって通説とされてきたことが覆ることとなった。新しく行われた地理学的調査および検討の結果によれば、人的活動が展開されたすべての時期を通して、この場所は石灰岩の断崖の麓に位置する開けた土地

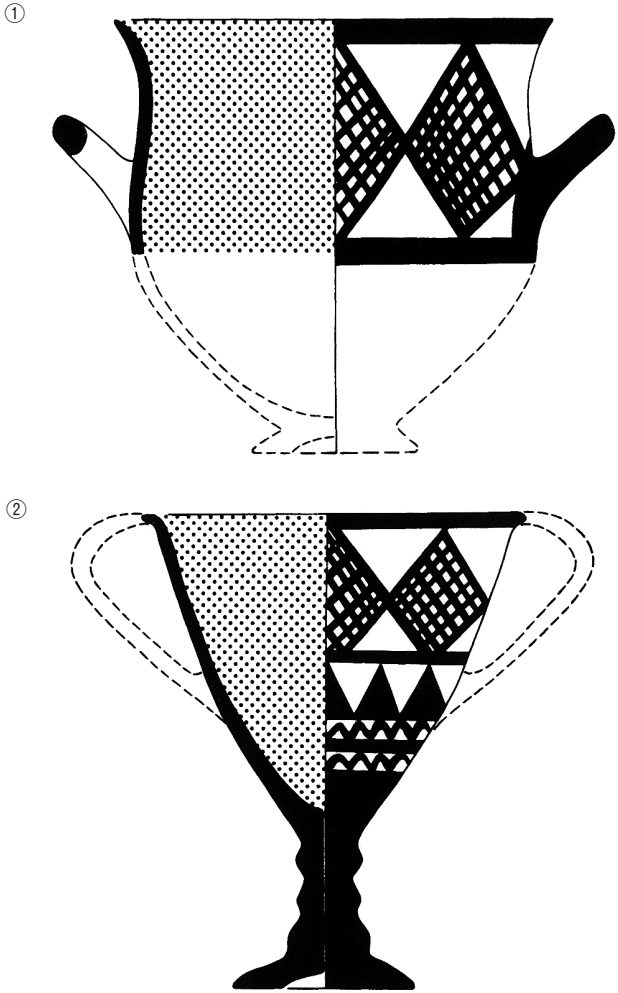

図２　ポリス出土の初期鉄器時代の土器
（①は直径15.5cm、②は高さ16.5cmで口縁部の直径が13cm。
出典：Coulson 1991, 54, fig.5, no.26, no.31）

であったという[20]。ここが洞窟という非日常的な雰囲気を醸し出す場ではなかったという新たな調査結果は、この遺跡の性格および宗教活動について再考を迫る重要な指摘である。それならばいかなる要因により聖なる場所と見なされるようになったのか、新たな問いが生じたと言えよう。

ポリスは新石器時代や初期青銅器時代の使用も認められる長い歴史を有する遺跡であり、ミケーネ時代後期からローマ時代後期にかけての資料数は4000前後に上るという[21]。宗教行為は遅くとも初期鉄器時代には開始され、前300年以降に石壁が設けられ聖域の刷新が図られた。そして宗教活動はローマ時代まで継続された[22]。

信仰の対象に関しては上記のとおりオデュッセウスが祀られていたことが知られているが、ただしそれが文字史料によって確認できるのは前２世紀が最初のことである。それ以前にオデュッセウスが信仰されていたか否かは不明である[23]。またヘレニズム時代の資料からはニンフが祀られていたことも明らかとなっており、この遺跡は“ニンフの洞窟”とも呼称されてきた[24]。さらにアテナやヘラに関する資料も発見されている[25]。ただし初期鉄器時代に関しては、誰が祀られていたのか確たることは判明していない。

以下、ポリスの初期鉄器時代、それに続く前古典期について見ていくこととしよう。

（２）初期鉄器時代

ポリスの資料は初期鉄器時代に関してさまざまな重要な知見をもたらしており、たとえばその出土土器はギリシアの西方地域におけるこの時代の編年研究に多大な貢献を果たしている[26]（図２）。それ以外にも看過しえない要素があるので、詳しく見ていくこととしよう。

①聖域としての開始

ポリスに関しては既にミケーネ時代に宗教施設であったと記す文献もあるが[27]、土器の種類を検討した近年の研究によれば、この場所が聖域として使用されるようになったのは前10世紀ごろである。宗教儀式に使用されたと推測される小型の土器が占める割合がこの頃に圧倒的に優勢となり、お神酒を飲むような儀礼行為が行われるようになったと推測されている[28]。それ以前のこの土地の機能に関しては不明であるが宗教活動が行われていた形跡はうかがわれず、前10世紀ごろに変化が生じて新しく聖なる場として使用されるようになったと

言えよう。

先にも記したが、一般に初期鉄器時代に関してはその後期になるまで宗教関連資料が少なく、たとえば21世紀に入ってから新たな発掘報告が発表されたポロス島カラウレイアでも宗教活動が確認されるようになるのは後期幾何学文様期に入ってからである[29]。ただし近年ではかかる資料傾向に徐々に変化が見られるようになってきたのも事実であり、キオス島のカト・ファナは原幾何学文様期から既に聖域であった可能性が指摘されている[30]。イタケ島ポリスは初期鉄器時代でも前半期から宗教活動が行われていた遺跡として、新しい動向に拍車をかけるものと言える。

そしてこの問題に関しては、この遺跡が洞窟ではなかったという上記の新しい地理学的知見が重要な意味を有している。というのもクレタ島の洞窟においては後期青銅器時代から初期鉄器時代にかけて継続して宗教活動が行われていた遺跡が確認されているため、イタケ島ポリスもかつて洞窟聖所と見なされていたときにはそれに類する遺跡と解釈することが可能であり、初期鉄器時代前半期の宗教関連資料が出土しても必ずしも特別視する必要はなかった。しかし洞窟という特殊な空間ではなく野外の開けた土地であったことが明らかとされた現在では、それが意味するところは大きく異なる。しかもそれ以前は別の用途で使用されていたと考えられ、なぜこの時期にこの場所が聖なる地へと変貌を遂げたのか、島全体の資料を踏まえた上で議論される必要がある。

ポリスの後期青銅器時代からローマ時代にいたる各世紀の土器の出土数に関する統計的研究によれば、宗教活動の最初のピークは前８世紀であるという。ポリスからは初期鉄器時代に属する建築遺構は発見されておらず、一般にギリシア世界で神殿が建造されるようになる前８世紀になっても祭壇のような何らかの設備が存在した形跡はうかがわれない。それは土地が狭いことと関係しているのかもしれないが[31]、明確な理由は不明である。ただしそれでも前10世紀ごろに開始された宗教行為が数世紀をかけて発展していったことが見て取れる[32]。

かかる事例は当該期の宗教関連資料として稀有な存在である。洞窟聖所ではないことが明らかとなった現在、ますますの注目を集めることになるであろう。

②三脚の鼎

ポリス出土の初期鉄器時代の遺物を代表するものに、青銅製の鼎がある[33]。三脚の鼎はこの時代を代表する奉納品であり、出土例がある遺跡としてはとりわけオリンピアが有名である[34]。イタケ島ポリスではベントンの発掘により少

なくとも12個体が発見された[35]。さらにベントンの発掘が開始される前に既に完形品の鼎が発見されたことがあり、溶かされてしまったという[36]。私見ではあるが、現代にいたるまでに同様の行為が他にも行われていた可能性があるように感じる。

具体的な事例を三つ紹介しよう。まずはベントンの報告論文におけるカタログNo.２で、形態から判断して早い時期に属するタイプである（図３）。発見されたのは脚部で、下部が破損されていた。残存部の長さは21cmである。それをもとに、また取っ手は他の鼎のものを参考にして、復元予想図が作成された（釜部分の大きさは直径28cm、深さ14cmとして復元されている）。未だ形態的に発展していない時期のもので、脚部の模様も精緻ではない[37]。

次にベントンのカタログNo.３である（図４）。この個体に関しては４つの破片が発見されており、それに基づく復元予想図が公表されている。取っ手（No.３(b)）は直径21.5cm、脚（No.３(a)）は91cm、その車輪（No.３(d)）は直径12.4cmであり、それ以外に釜部分の口縁部（No.３(c)）が出土した。復元

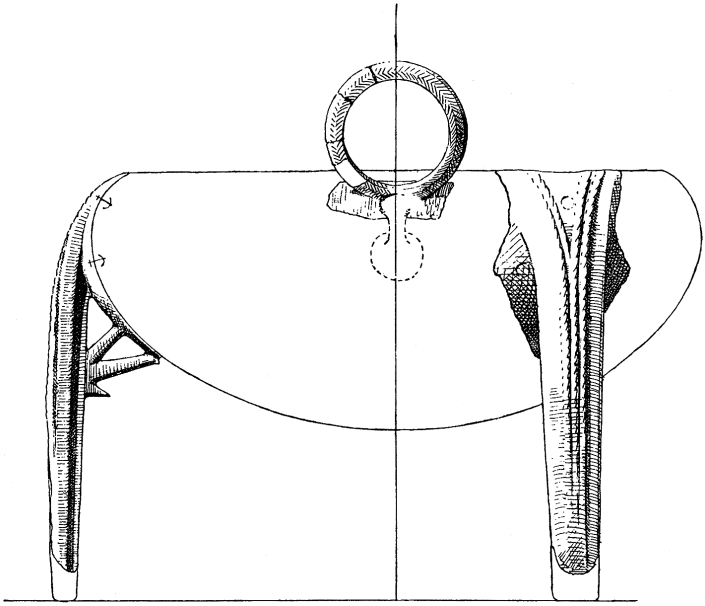

図３　ポリス出土の青銅製の鼎No.２
（出典：Benton 1934/1935a, 64, fig.14.a.）

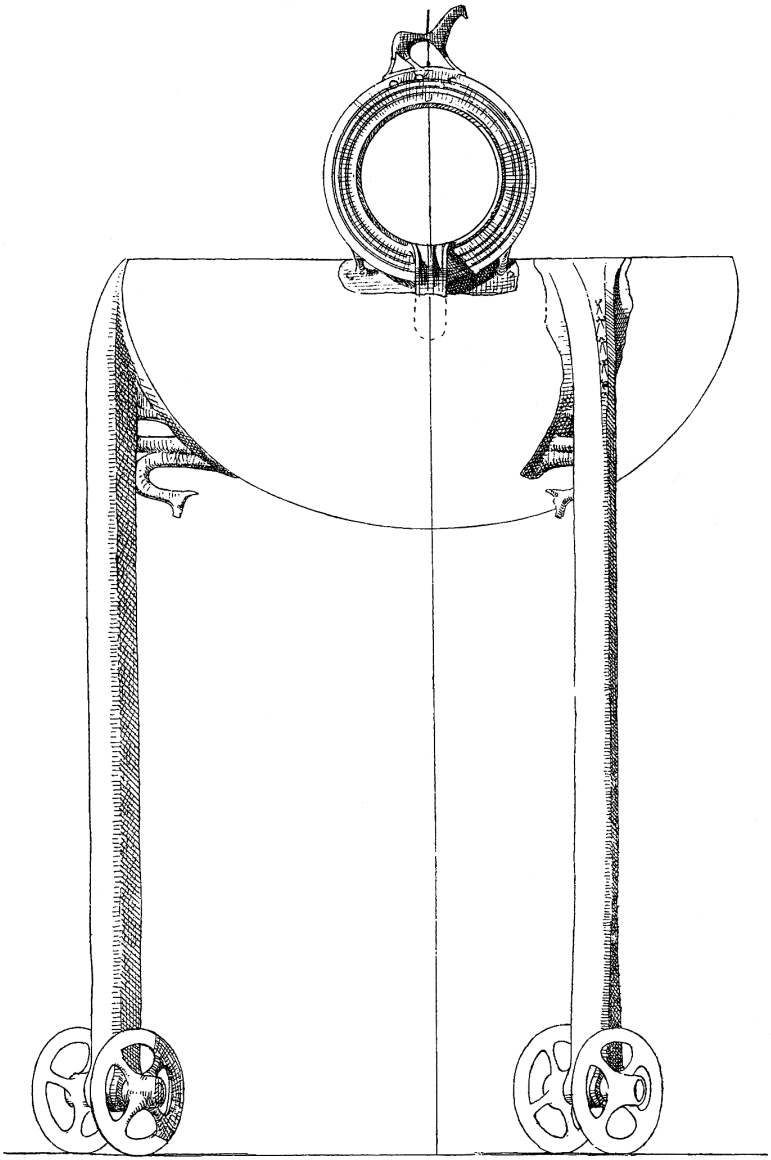

図４　ポリス出土の青銅製の鼎No.３
（出典：Benton 1934/1935a, 65, fig.15）

では釜の直径は64cm、深さが27.5cmとされており、大型化している。さらにNo.２よりも脚が長く、また車輪が付けられていることが顕著な相違点である[38]。

最後にベントンのカタログNo.９である（図５）。脚、取っ手、釜の口縁部が出土しており、それに基づく復元予想図が作成されている。取っ手（No.９(b)）は直径24cmで、頂上付近に馬の像が付されていた。さらにこの馬以外に別の像があった痕跡があり、復元図では人間の姿が付け加えられている[39]。また復元図における釜の直径は66.8cm、深さは31cmとされており、大型である。脚および取っ手の輪の部分には精緻な模様が施されており、技術的にレベルの高い製品であることがうかがわれる[40]。

これらの鼎はいずれも高価なものであったことは想像に難くなく、この場所がそれに見合う価値を有していたことを示唆している。ポリスの聖域は初期鉄器時代において既に大きな重要性を帯びていた。確認されている十数個の鼎すべてが同一の時期に属するわけではないが、それでも複数個が同時に供えられていた可能性は高いと筆者は推測している。かかる光景は特別な（もしくは非日常的な）空間を演出する効果を果たしており、壮観であったであろう。

初期鉄器時代における青銅製の鼎に関してはエウボイア島のレフカンディが生産地として名高いが[41]、イタケ島では後述するアエトスから鼎の脚の鋳型が発見されている[42]。そのためC.モーガンは2007年に発表した論文ではポリスの鼎はアエトスで作られた可能性を推測しているが[43]、しかし他の研究者との共著である2021年の論文ではその産地に関しては未だ不明と記載しており[44]、やや混乱が見受けられる。ただしやはり、今のところ確実ではないが、アエトスで制作された可能性は高いと思われる。

最後に、オリンピアから出土した鼎に関しては科学的な分析が行われ、ヨルダンの銅が使用されていたことが明らかとされている[45]。ポリスの鼎にも同様の研究が進展することが望まれる[46]。

（３）前古典期

ポリスでは初期鉄器時代に続いて前古典期においても、活発な宗教活動が展開された。

前古典期の遺物の中でもとりわけユニークなものの一つに、土製のスフィンクス像がある。1932年にベントンが発見したもので、スフィンクスを象った自立する奉納像として稀有な例である。頭部、上半身および前足の一部が残っており、残存部の高さは29.5cmである。おそらく全体では47～50cmの高さとな

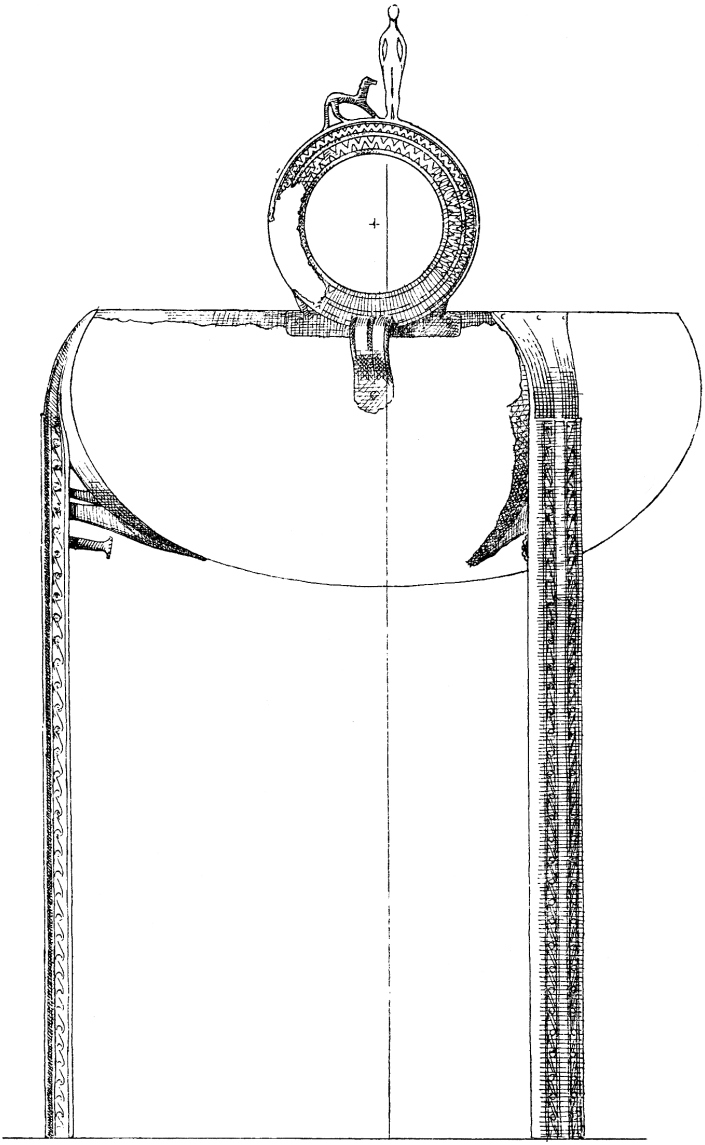

図５　ポリス出土の青銅製の鼎No.９
（出典：Benton 1934/1935a, 67, fig.17）

り、胴体は赤茶色に塗られていた痕跡があった。他の遺物との比較から、地元で制作された品であることは明らかである[47]。またベントンは元来は２体で一対であり、発見されたのはその内の１体であると推測したが[48]、それに関しては説得的な根拠があるわけではない[49]。

年代に関しては、その決定のために有益な遺物が共に発見されなかったため、確実な判断材料が存在しない。当初ベントンにより幾何学文様期という意見が提示されていたが[50]、ただしその後異論も提出された。より新しいところでは関連資料を精査したC. モーガンが、前675/650年前後と結論している[51]。

周知のとおりスフィンクスはエジプトやメソポタミアに起源を持つもので、古代ギリシアでも土器の図像などに表現された[52]。多様な資料が存在し、たとえば後期青銅器時代IIIC期の土製像“アシネの領主”はクレタやキプロスで作られた想像上の生き物の像に似ていることから[53]、スフィンクスの可能性も推測されている[54]。土器の図像としては幾何学文様期にスフィンクスが描かれた例が発見されており[55]、また前古典期に入ると前７世紀のコリントス製の土器でとりわけ好まれた図柄でもあった[56]。イタケ島アエトス出土の前700年ごろの土器にもスフィンクスの図像が描かれている[57]。

ギリシア世界においてスフィンクスを表現した図像や造形作品がいかなる意味を有していたのかは一概に論じることはできず、ポリス出土の土製像に関してもどのような意味で作られたのかは不明である。ただし他の聖域からは未だ出土例がない稀有な遺物であり、ポリスの奉納品における独自性が示唆されている。

ポリスの聖域は洞窟ではなく屋外の平地であることが明らかとされたが、しかし何らかの施設が設けられることはなく、自然の景観を活かした信仰の場であった[58]。初期鉄器時代には鼎が供えられ壮観な光景が演出され、また前古典期のスフィンクスは独自色の強い奉納品であった。狭い土地における宗教活動の場ではあったが、聖域として発展した様相がうかがわれよう。

アエトス

（１）概要

アエトスは南北二つに分かれるイタケ島の中で、南方領域の北西部に所在している。アエトス山の頂上部には古代の城壁が残されており、19世紀以来旅行

家や研究者が訪れ注目を集めてきた。アエトス山下方の鞍部からは研究史の初期段階に建築遺構や墓が発見され、中には豪華な墓も含まれていたようであるが、記録が残っていないのみならず、遺憾なことに遺物も散逸してしまった[59]。

アエトスにおいて本格的な発掘が開始されたのはポリス同様に1930年代である。イギリスの調査隊によりアエトス山の鞍部の教会付近において発掘が行われ、後述するケルンと名付けられた遺構などが発見された[60]。また1980年代からはワシントン大学による調査が開始され、さらなる資料がもたらされた[61]。そしてこれらの調査の成果により、アエトスに関しては青銅器時代からローマ時代、さらにはビザンツ時代にいたる様々な時代の資料が発見されている[62]。

以下、初期鉄器時代に焦点を当てて、資料を紹介しよう。

（２）ケルン一帯（cairns area）における宗教活動

初期鉄器時代におけるある程度の規模がある集落として、アエトスは現在のところイタケで唯一の存在である。さらに重要なことに集落の中で宗教活動が行われていたことが確認されており、稀有なことにそれが初期鉄器時代でも前半期にまで遡ることが明らかとなっている[63]。そのためこの時代を専門とする研究者の耳目を集めてきた。

注目されてきた資料はイギリスの調査隊によってケルンと名付けられた遺構である[64]。石が集積されたケルンという呼称の遺構が複数か所発見されており、そこから初期鉄器時代の土器片や動物の骨などが出土した。またベントンによれば、その内の一つは油脂分を含んだ黒色土で囲まれていたという[65]。これらのケルンの性格および成り立ちに関しては議論があり[66]、たとえばコールドストリームのように宗教に関わりのある遺構と見なす研究者もいれば[67]、そうではなく居住関連のものとする意見もある。今もって判断が難しいが、ただし21世紀に入ってからケルン周辺の資料に関して再検討が行われ、新しくこの一帯の歴史が詳らかにされた（図６）。

それによるとこの場所には元来、後期青銅器時代に建造物Ｂという建物が存在した。その機能は不明である。その後初期鉄器時代に入ってから、前11世紀後期に建造物Ｃが建てられた。それがそれ以降の一連の宗教活動の端緒である。建造物Ｃ以外に初期鉄器時代には別の建物も建立されたが、それらが宗教施設であったか否かは議論の余地がある問題である[68]。宗教と関係がある建物ではなく、エリート層の家屋と記している文献もある[69]。ただし、建物自体は宗教施設ではなかったとしても、宗教儀式に使用される土器が出土していることな

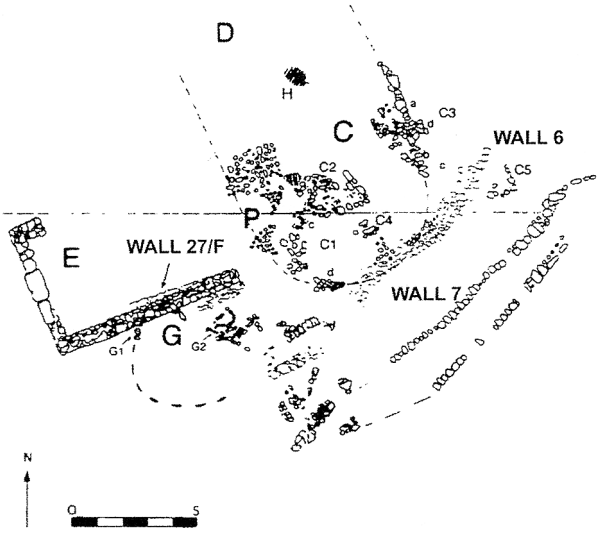

図６　アエトスにおけるケルン一帯の遺構
（出典：Morgan 2011, 123, fig.2）

どから[70]、初期鉄器時代を通してこの場所で宗教活動が行われていたことは明らかである。しかも前８世紀後期になると奉納品は豪華になっており[71]、数世紀の間に発展を遂げたことが確認されている。その後前古典期に入って、おそらくは前７世紀に、長方形の建造物Ｅが宗教施設として建立された。さらに前６世紀にはアポロン神殿（建造物Ａ）が建てられ、すなわち前古典期に入るとこの一帯は宗教関連の用途に限定されるようになった[72]。

初期鉄器時代の建築遺構に関する著名な研究書の中でマザラキス・アイニアンは後期青銅器時代や初期鉄器時代の支配階層の住居が神殿に取って代わられる事例について検討しているが[73]、モーガンが指摘しているようにアエトスのケルン一帯における建造物の変遷はそれに該当しよう[74]。

（３）その他

アエトスからは初期鉄器時代に関する稀有な遺物が発見されており、たとえば、既にポリスの項で記したとおり、鼎を製造するための鋳型が出土している。アエトスのエリート層が自らのステータスを誇示するために金属製品を利用し

ていたことが看取され[75]、またかかる生産活動は富を獲得する手段としても有益であったとも推察されよう。それ以外にも、文字を伴う土器などこの時代の研究において看過しえない資料が発見されている[76]。

さらに宗教関連の重要資料と目されてきたのが、1930年代にイギリスの調査で発見されたアエトス600（Aetos 600）という遺物である。1948年にM. ロバートソンが報告した土製品の破片であり、カタログの番号が600であった。当初は７個の部分品が同一個体と判断され、全体的には家屋のような形状をしていると推測されていた。ロバートソンはそれを神殿の模型として記載している[77]。その後別の研究者により復元予想図が作成され、アルゴスのヘライオンやペラホラの神殿模型と同様に、ギリシア世界に神殿が登場した初期段階の資料として流布することになった[78]。しかし一方で一連の検討や復元には誤りがあることが指摘されており、別個体の遺物の破片が含まれていることも明らかとなった[79]。最終的にモーガンの検討により４つの部分品が同一個体の破片であるとされ、現在はそれらがアエトス600とされている（図７）。

アエトス600は全体では箱のような形状をしていたと推測されており、アエトス600BおよびＤは底部の角の部分である。制作年代は、正確には断定できないが、おそらく前８世紀末～７世紀初めごろである。またアエトス600AおよびＣには図像表現がある程度残されており、その点に関する分析において資料的価値が高い。アエトス600Aは最大で高さが4.3cm、幅は3.8cmであり、馬とそれに乗った人物が描かれている。馬はエリート階層の社会的地位や権力の象徴であったと見なされており[80]、当時この製品（アエトス600）が有していた社会的な意義や重要性がうかがわれよう。一方アエトス600Cは最大で高さが５cm、幅が3.3cmで、二人の人物が向き合って立っている姿が描写されている。両者は手を握り合っており、男性であると判断されている[81]。

アエトス600がかつて考えられていたような神殿の模型ではないとしても秀逸な造形作品であることには変わりがなく、またその図像学的分析から宗教関連の品であったと見なされている[82]。初期鉄器時代後期もしくは前古典期初期における稀有な遺物であり、アエトス社会を解明する上で重要な資料である。

アエトスでは初期鉄器時代の集落の内部において、宗教活動が行われていた。そして前古典期に入ると、そこは宗教に特化した場となった。また初期鉄器時代においてアエトスでは鼎が生産されており、さらに初期鉄器時代後期から前古典期初期に年代づけられるアエトス600のような希少な製品も制作された。

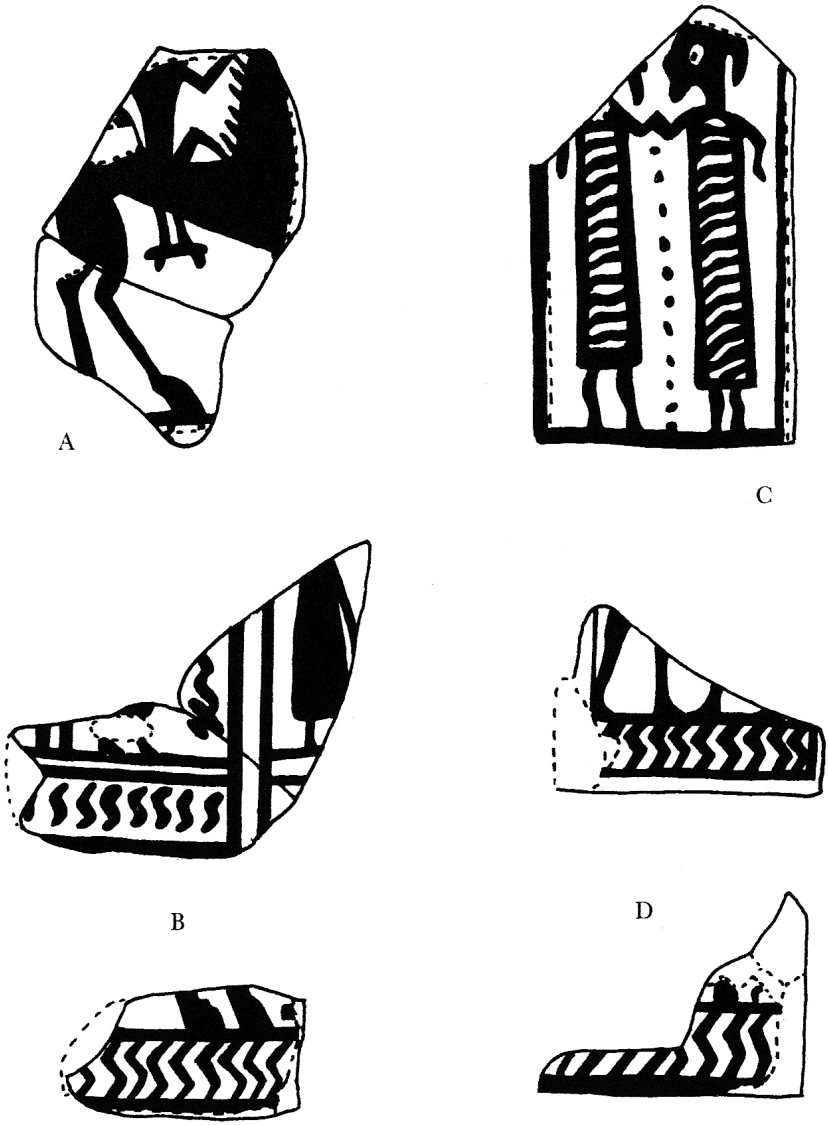

図７　アエトス600
（左側の下二つの破片が接合されてアエトス600B、右側の下二つがアエトス600Dである。
出典：Morgan 2001, 199, fig.3）

このようなことに関与していたのはおそらくは集落のエリート層であり、漠として把握しがたいこの時代に関してアエトスは多少なりともその具体像を垣間見ることが可能な遺跡である。

おわりに

ポリスとアエトスに関しては21世紀に入ってから新たな知見が得られ、その具体像が解明されつつある。そして稀有で重要な資料が出土していることを痛感させられるたびに、なぜイタケという小さな島に初期鉄器時代の宗教に関して重要な遺跡が二つも存在するのか、という疑問が頭をよぎる。それに関して確たる答えを導き出すことは、少なくとも現時点においては、不可能である。まずはポリスとアエトスのみならずイタケ全体に関して調査や研究が一層進展し、より詳細な実態が詳らかにされることを期待したい。

ポリスとアエトスは初期鉄器時代前半期から宗教関連資料が確認されているという共通点もあるが、しかし相違点も存在する。ポリスは建造物による設備を伴わないまま聖域として発展し[83]、初期鉄器時代の鼎や前古典期のスフィンクスのような人目を惹く奉納品が置かれた。一方のアエトスでは初期鉄器時代においては集落の内部で宗教活動が行われていたが、前古典期になるとそこに神殿が建立された。また鼎の生産などおそらくはエリート層が主導したと推測される活動も明らかとなっている。このように一つの島の中で異なる性格を有する初期鉄器時代の重要遺跡が複数存在し、地域全体の当該期の様相を分析することができるという点において、イタケは有益な研究対象である。

またその地の利を考えれば当然のことではあるが、初期鉄器時代のイタケがピテクーサイなどナポリ湾周辺の集落と接触を持っていたことが明らかとなっている[84]。初期鉄器時代におけるギリシアとイタリア半島をはじめとした西方地域との関係を考える上でも、イタケは重要な場所である。

筆者が最終的に目標とするところは初期鉄器時代におけるギリシア世界を全体として把握することであるが、イタケはこの時代の宗教や信仰、対外関係など幅広いテーマにおいて刮目すべき資料を提供してくれる場所である。時代像全体の構築を目指すためにも、今後もこの島の資料に注目していきたい。

1 Souyoudzoglou-Haywood 1999, 3.
2 Souyoudzoglou-Haywood 1999, 3.
3 ホメロスの叙事詩とイタケをめぐっては、研究史の初期段階から関心が持たれてきた。関連文献としてたとえば、Lord Rennell of Rodd 1932/1933.
4 たとえば、Dörpfeld 1927.
5 シュリーマンのイタケに関する文献として、Schliemann 1869. またイタケに関する研究史全般に関しては、Souyoudzoglou-Haywood 1999, 9, Livitsanis 2013, 96-97.
6 Heurtley & Lorimer 1932/1933, Heurtley 1934/1935, Benton 1934/1935a, Benton 1938/1939, Heurtley 1939/1940, Heurtley & Robertson 1948, Waterhouse 1952. Cf. Benton 1931/1932, 229.
7 Livitsanis 2013, 98-99.
8 ローマ時代に関しては、Livitsanis 2013, esp.106-114, 120-124.
9 Souyoudzoglou-Haywood 1999, 102-108.
10 Benton 1934/1935a, 46.
11 Vollgraff 1905, Benton 1934/1935a, 47.
12 Antonaccio 1995, 152, Morgan & Hayward 2021, 79.
13 Benton 1934/1935a, Benton 1938/1939. さらに、cf. Benton 1949.
14 Benton 1934/1935a, 54.
15 Coulson 1991.
16 Deoudi 2008a.
17 Morgan & Hayward 2021, 88, n.6.
18 Benton 1934/1935a, 47-48.
19 たとえば、Waterhouse 1996, 303-304.
20 Morgan & Hayward 2021, 71-76.
21 Morgan & Hayward 2021, 70.
22 Benton 1934/1935a, 48-49, Morgan & Hayward 2021, 80, 86.
23 Morgan & Hayward 2021, 70, 86.
24 Benton 1938/1939, 35. この遺跡の信仰の対象に関してはさらに、cf. Antonaccio 1995, 152-155.
25 Antonaccio 1995, 153.
26 ポリスの土器に関する論文として、Coulson 1991.
27 Waterhouse 1996, 303-304.
28 Morgan & Hayward 2021, 77.
29 髙橋 2021、191-197。
30 髙橋 2021、181。
31 Cf. Morgan & Hayward 2021, 76.
32 Morgan & Hayward 2021, 77-78.
33 ベントンは青銅製の鼎と記載している（Benton 1934/1935a, 56）。ただしベントンの報告論文の中で、鼎の破片６個に関する成分分析の結果が報告されており、いずれも青銅ではなく、純粋に銅であると記されている（Benton 1934/1935a, 73）。

34 Snodgrass 2000, 281-285. 三脚の鼎はホメロスの叙事詩にも言及されている（Whitley 2001, 144）。
35 Benton 1934/1935a, 52-53. 出土した鼎のカタログとして、Benton 1934/1935a, 56-62. さらに、cf. Deoudi 2008a, 225-231.
36 Benton 1934/1935a, 46-47.
37 Benton 1934/1935a, 58.
38 Benton 1934/1935a, 58-59.
39 Benton 1934/1935b, 86. 復元予想図ではデルフォイの資料をもとに馬の横に人物像が加えられている（Benton 1934/1935a, 62）。
40 Benton 1934/1935a, 61-62.
41 髙橋 2017a、46。
42 Morgan 2007, 77.
43 Morgan 2007, 77.
44 Morgan & Hayward 2021, 82.
45 髙橋 2022、29。
46 註33でも記したとおり、ベントンの報告論文でも科学的な成分分析は行われてはいる（Benton 1934/1935a, 73）。
47 Morgan 2008, 35-36. さらにこのスフィンクス像に関する関連文献として、Mylonopoulos 2016, 243-244.
48 Benton 1934/1935a, 53.
49 Cf. Morgan 2008, 38.
50 Benton 1934/1935a, 53, Benton 1938/1939, 38-39.
51 Morgan 2008, 38.
52 Cooper 2008, 45.
53 髙橋 2017b、117-118。
54 Morgan 2008, 37.
55 Rombos 1988, 244-254.
56 Cooper 2008, 45.
57 Heurtley & Robertson 1948, 42. Cf. Morgan 2008, 38.
58 Morgan & Hayward 2021, 88.
59 Souyoudzoglou-Haywood 1999, 95.
60 Heurtley & Lorimer 1932/1933, Heurtley & Robertson 1948, Benton with Anderson 1953. さらに、Robertson 1955.
61 *Ἔργον 1987*, 1988, 75-76, *ΠΑΕ 1986*, 1990, 234-240, *Ἔργον 1992*, 1993, 91-93, *ΠΑΕ 1989*, 1992, 292-295.
62 アエトスの概要に関しては、Waterhouse 1996, 304-310, Souyoudzoglou-Haywood 1999, 95.
63 Cf. Morgan 2006, 218.
64 図6のC1~C5がケルンである。Cf. Heurtley & Lorimer 1932/1933, 26, fig.3.
65 Benton with Anderson 1953, 255.
66 この問題に関する研究史がまとめられている参考文献として、cf. Souyoudzoglou-

Haywood 1999, 109.
67 Coldstream 2003, 182-184.
68 これはケルンの性格や成り立ちにも関係する問題である。
69 Morgan 2017, 204. ケルンは建物内部の炉（Morgan 2006, 218）、もしくは建物内部もしくはその近辺で廃棄物が堆積したものであろう（Morgan 2011, 114）。
70 Morgan 2006, 218.
71 Morgan 2017, 204.
72 Morgan 2011, 114, Morgan 2017, 204. 既に前780年ごろにこの場所は宗教活動に特化されていたと考える研究者も存在する（Mazarakis Ainian 1997, 241-242）。
73 Mazarakis Ainian 1997, 346-349.
74 Morgan 2011, 114.
75 Morgan 2007, 76-77.
76 Heurtley & Robertson 1948, 81-82, no.490.
77 Heurtley & Robertson 1948, 101-102.
78 Morgan 2001, 197, fig.1.
79 Morgan 2001, 196.
80 Cf. Langdon 2008, 99, 242-243.
81 Morgan 2001, 200-213.
82 Morgan 2001, 211.
83 後代になると石壁が設けられた。
84 Morgan 2001, Morgan 2006.

文献一覧

Antonaccio, C. M. 1995: *An Archaeology of Ancestors: Tomb Cult and Hero Cult in Early Greece*, Lanham & London.
Benton, S. 1931/1932: The Ionian Islands, *BSA* 32, 213-246.
——— 1934/1935a: Excavations in Ithaca, III: The Cave at Pólis, I, *BSA* 35, 45-73.
——— 1934/1935b: The Evolution of the Tripod-Lebes, *BSA* 35, 74-130.
——— 1938/1939: Excavations in Ithaca, III: The Cave at Polis, II, *BSA* 39, 1-51.
——— 1949: Second Thoughts on 'Mycenaean' Pottery in Ithaca, *BSA* 44, 307-312.
Benton, S. with J. K. Anderson 1953: Further Excavations at Aetos, *BSA* 48, 255-361.
Benton, S. & H. Waterhouse 1973: Excavations in Ithaca: Tris Langadas, *BSA* 68, 1-24.
Coldstream, J. N. 2003: *Geometric Greece*, second edition, London & New York.
Cooper, C. 2008: The Riddle of the Sphinx: A Protocorinthian Vase from Perachora and the Sphinx in Corinthian Art, in Kurz with Meyer, Saunders, Tsingarida & Harris eds. 2008, 45-54.
Coulson, W. D. E. 1991: The 'Protogeometric' from Polis Reconsidered, *BSA* 86, 43-64.
Deoudi, M. 2008a: *ΙΘΑΚΗ: Die Polis-höhle, Odysseus und die Nymphen*, Thessaloniki.
——— 2008b: Die Keramik der ionischen Inseln zwischen stilistischer Abhängigkeit und regionaler Selbständigkeit in der Zeit der ›Dunklen Jahrhunderte‹, *AM* 123, 151-176.

Dörpfeld, W. 1927: *Alt-Ithaka*, München.

Heurtley, W. A. 1934/1935: Excavations in Ithaca, II: The Early Helladic Settlement at Pelikáta, *BSA* 35, 1-44.

——— 1939/1940: Excavations in Ithaca, 1930-35, *BSA* 40, 1-13.

Heurtley, W. A. & H. L. Lorimer 1932/1933: Excavations in Ithaca, I. LH III-Protogeometric Cairns at Aetós, *BSA* 33, 22-65.

Heurtley, W. A. & M. Robertson 1948: Ecavations in Ithaca, V: The Geometric and Later Finds from Aetos, *BSA* 43, 1-124.

Kurz, D. with C. Meyer, D. Saunders, A. Tsingarida & N. Harris eds. 2008: *Essays in Classical Archaeology for Eleni Hatzivassiliou 1977-2007*, BAR International Series 1796, Oxford.

Langdon, S. 2008: *Art and Identity in Dark Age Greece, 1100-700 B.C.E.*, Cambridge.

Livitsanis, G. 2013: The Archaeological Work of the 35th Ephorate for Prehistoric and Classical Antiquities at Ithaka: A Brief Presentation, *Pharos* 19(1), 95-126.

Lord Rennell of Rodd 1932/1933: The Ithaca of the Odyssey, *BSA* 33, 1-21.

Mazarakis Ainian, A. 1997: *From Rulers' Dwellings to Temples: Architecture, Religion and Society in Early Iron Age Greece (1100-700 B.C.)*, Jonsered.

Morgan 2001: Figurative Iconography from Corinth, Ithaka and Pithekoussai: Aetos 600 Reconsidered, *BSA* 96, 195-227.

——— 2006: Ithaka between East and West: The Eighth Century Figured Repertoire of Aetos, in E. Rystedt & B. Wells eds., *Pictorial Pursuits: Figurative Painting on Mycenaean and Geometric Pottery —Papers from Two Seminars at the Swedish Institute at Athens in 1999 and 2001*, Stockholm, 217-228.

——— 2007: From Odysseus to Augustus. Ithaka from the Early Iron Age to Roman Times, *Pallas 73, IDENTITÉS ETHNIQUES dans Ie monde Grec Antique: Actes du Colloque international de Toulouse organisé par le CRATA 9 - 11 mars 2006*, 71-86.

——— 2008: An Early Archaic Sphinx from the Polis Cave, Ithaka (Stavros 59), in Kurz with Meyer, Saunders, Tsingarida & Harris eds. 2008, 35-43.

——— 2011: The Elite of Aetos: Religion and Power in Early Iron Age Ithaka, in A. Mazarakis Ainian ed., *The "Dark Ages" Revisited: Acts of an International Symposium in Memory of William D. E. Coulson, University of Thessaly, Volos, 14-17 June 2007*, vol. I, Volos, 113-125.

——— 2017: Corinthian Sanctuaries and the Question of Cult Buildings, in X. Charalambidou & C. Morgan eds., *Interpreting the Seventh Century BC: Tradition and Innovation*, Oxford, 193-211.

Morgan, C. & C. Hayward 2021: Caves and Consumption: The Case of Polis Bay, Ithaca, in S. Katsarou & A. Nagel eds., *Cave and Worship in Ancient Greece: New Approaches to Landscape and Ritual*, London & New York, 70-92.

Mylonopoulos, J. 2016: Terracotta Figurines from Ithaca. Local Production and Imported Ware, in A. Muller, E. Lafli & S. Huysecom-Haxhi eds., *Figurines de terre cuite en Méditerranée grecque et romaine,* 1: *Production, diffusion, étude*, BCH Supplément

54, Athènes, 239-251.
Pentedeka, A., C. Morgan & A. Sotiriou 2018: Early Helladic Pottery Traditions in Western Greece: The Case of Kephalonia and Ithaca, in E. Alram-Stern & B. Horejs eds., *Pottery Technologies and Sociocultural Connections between the Aegean and Anatolia during the 3rd Millennium BC*, Vienna, 267-285.
Robertson, M. 1955: Gold Ornaments from Crete and Ithaca, *BSA* 50, 37.
Rombos, T. 1988: *The Iconography of Attic Late Geometric II Pottery*, Jonsered.
Schliemann, H. 1869: *Ithaka, der Peloponnes und Troja*, Leipzig.
Snodgrass, A.M. 2000: *The Dark Age of Greece*, New York.
Souyoudzoglou-Haywood, C. 1999: *The Ionian Islands in the Bronze Age and Early Iron Age 3000-800 BC*, Liverpool.
Symeonoglou, N. 2002: *The Early Iron Age Pottery and Development of the Sanctuary at Aetos, Ithaka (Greece)*, Washington (unpublished PhD dissertation).（筆者未見）
Vollgraff, W. 1905: Fouilles d'Ithaque, *BCH* 29, 145-168.
Waterhouse, H. 1952: Excavations at Stavros, Ithaca, in 1937, *BSA* 47, 227-242.
――― 1996: From Ithaca to the Odyssey, *BSA* 91, 301-317.
Whitley, J. 2001: *The Archaeology of Ancient Greece*, Cambridge.

髙橋裕子 2017a：「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（２）レフカンディ」『史苑』第77巻第２号、35-78頁。
――― 2017b：「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（３）アシネ」『マテシス・ウニウェルサリス』第19巻第１号、107-137頁。
――― 2021：「ギリシアの初期鉄器時代の遺跡（４）カラウレイアのポセイドンの聖域」『マテシス・ウニウェルサリス』第23巻第１号、181-204頁。
――― 2022：「ギリシアの初期鉄器時代　―青銅器時代終末期以来の社会変動と対外関係」『古代文化』第74巻第１号、24-36頁。